

安全保障フォーラムの概要と今後の展望

京都大学公共政策大学院十三期 小山 貴大

十四期 高橋 祐介

——安全保障フォーラムはどのような沿革で活動が行われてきたのでしょうか。

小山…安全保障フォーラムは比較的新しい自主活動で、二〇一九年四月に公共政策大学院の自主活動になりました。十二、三年ほど前から、公共政策大学院生を主として、毎年、有志で防衛大学校生とディベートをしていたのですが、今後は、防衛関連以外の様々なアクターと安全保障について考えたいと思ったので、自主活動としての組織化をしました。

——どのような活動を行っているのですか。

小山…伝統的な防衛や外交のみならず、エネルギーや食糧、経済など、安全保障の意味が幅広くなっている中で、公共政策の一翼

を担う安全保障について、総合的な観点から安全保障について捉え、自学自習や学外者との交流を通じ理解を深めるという活動を行っています。具体的には、活動に参加している社会人学生の方々から協力してもらいながら、企画能力、調整能力、プレゼンテーション能力、ビジネスマナー等の能力を高めています。

——主に、外交や安全保障の分野に取り組んでいるということですが、所属しているメンバーはどのような分野に関心がある人が参加しているのですか。

小山…外交や安全保障に関心がある人が多いですが、他にも、経済政策や警察行政、厚生労働政策に興味・関心を持っている人もいます。幅広く総合安全保障という観点を

持つために活動しているので、その分野に特化しているというわけではないです。

——高橋さんはどういうことに関心があつて所属したのでしょうか。

高橋…私自身は厚生労働政策にとっても興味があり、実は安全保障にあまり関心がありませんでした。厚生労働分野から見ると、自衛隊はブラックな職場とよく耳にすることが多くあります。自衛官として働いている親族がいることもあり、自衛官はどのような働いているのか、自衛隊はどのような職場なのか純粋に興味がありました。そのような考えから、安全保障フォーラムに関わり始めました。

——安全保障フォーラムの活動の目的・意義

はどのようなところにあると考えていますか。

小山…公共政策の一役を担う安全保障について、外交や防衛のみならず、幅広く総合安全保障の観点を養うことです。そのために、勉強会を定期的に行っています。今後は防衛大学校や自衛官など、より幅広くいろいろなアクターと交流していきたいと思っています。そのような方々との交流を通じて、理解を深めていくということも目的の一つです。

——活動を通じて得られた経験や知見はありますか。

小山…活動の内容としては、防衛大学校の国際関係研究部と呼ばれる部活動の学生たちと一緒に、日本の安全保障政策に対するテーマを設定した上でのディベートを行うことと、自衛隊の基地見学です。ディベートを行うことで、安全保障に関する知識を身につけることができます。また、実際に自衛隊に行き、報道などでは分からないような

安全保障のハード面での現場や前線を見ることで、理解を深めることができます。その他には、日々の勉強会を通じて、総合安全保障の様々な分野への理解を深めることができるということもあります。防衛大学校とのディベートでは、私たちはチーム京大として、班ごとに意見をつくるのですが、その際、意見の矛盾や調整が必要な部分が出てくるので、そのようなところを調整・議論をすることで、調整能力や政策立案能力が身につきます。

——高橋さんはどのような経験や知見を得ることができましたか。

高橋…安全保障という言葉は結構漠然としているため、抽象的に考えがちなのですが、自衛隊の人に実際に会って話してみると、軽々しく「自衛隊は海外に行った方がよい」などと口にできないなと思いました。安全保障を我が事として考えるという視点が必要だと考えました。また、ディベートで深く考えていくうちに、メンバーとの意見対立が起こるのですが、そこをどう調整して

いくかということは、今後、どういう仕事につくのかまだわかりませんが、仕事で意見調整を行う上で役に立つことだと思っています。

——勉強会や防衛大学校とのディベート大会では、具体的にどのようなテーマについて議論していますか。

小山…勉強会は四月から八月まで行っているのですが、安全保障学入門という本を題材に、役割分担をきめ、発表とディスカッションを行います。面白かったテーマとしては、日本にとつてどのような朝鮮半島情勢が望ましいのかということについての議論です。そこではディベート能力や、安全保障に関する基礎知識を養うことを目的として行いました。

ディベートについては、去年は対中国戦略をテーマに、外交・防衛・経済のグループに分かれて、それぞれ政策を立案し、発表をしました。今年度は、日米同盟について扱います。日米同盟については、二つのシナリオを想定しています。一つ目は、仮

に日米同盟が悪化した場合、日本はどのように対応するのかということについて、外交と防衛の班に分かれ、そのシナリオにおいて、日本外交はどうするべきか、日本の防衛政策はどのように転換していくのかということについてディベートします。もう一つのシナリオとしては、どのように日米同盟を深化していくかということについて、外交と防衛の班に分かれてディベートをします。

——勉強会とディベート大会のテーマはどのように決定しているのですか。

小山…勉強会は今年から始めた取り組みで、発表者が毎回どのようなテーマを扱うかを決定します。先ほどの朝鮮半島情勢はその例の一つで、他には、経済安全保障をどのように拡充していくべきか、サイバー攻撃からどのように守ればよいかというような、幅広く安全保障のテーマについて、発表者が自分の興味のあるテーマについて発表してもらいます。

防衛大学校とのディベートでは、毎年異

なる議題に関して、防衛大学校の学生と調整しながら、テーマを決めています。毎年同じような議題ではなく、それぞれが関心のあるテーマについて京都大学と防衛大学校がそれぞれ案を出し合って、お互いこれがいと思うテーマに決定します。例えば、三年前は日露外交をどうするのかというテーマについてディベートを行いました。

——勉強会は今年からとのことですが、取り組みを始めた理由は何でしょうか。

小山…今年度から自主活動になるということ、自主的にやっていた頃と何かしら差異をつけようと考えました。以前は、防衛大学校とのディベートを行うだけの活動内容でした。しかし、折角一年間あり、自主活動としてやれるからこそ、安全保障に関する理解を深めたいと思い、勉強会を行うことで、日々高められるのではないかと考え、取り組みを始めました。

——防衛大学校とのディベートを通じ、どのようなことを学びましたか。

小山…行政官に必要な能力として、政策立案能力など様々あると思うのですが、政治的妥当性の必要性について感じました。防衛大学生の主張は、果たして国民世論から受け入れられるのかと考えた時に、疑問に思ふような政策が多かったです。そこがやはり、行政官と自衛官との違いなのだと感じました。

防衛大学生は、とてもリアリズム的な、常に最低の状況を見据えた考え方をしている、そのような視点は持っていなかったと感心する点も多くありました。ですので、リアリズムとリベリズムのバランス感覚が必要であると感じました。

——最後に、新しく今後取り組んでいる活動はありますか。

小山…今は防衛大学校とのディベートの準備で忙しいのですが、エネルギー安全保障という観点から、三重県にある風力発電の見学を考えています。

高橋…安全保障をこれまで防衛という面に焦

点をあてていたので、より視野を広げて、海洋資源の保護やエネルギー安全保障、食糧安全保障など、安全保障の他の分野を担っているアクターとの勉強会や研修をさせていたのだと思います。

小山…また、十一月祭の出店も考えています。日頃、安全保障とは堅いイメージを持たれがちなので、十一月祭を通じ、活動内容などの展示をしながら、安全保障に対する理解を広めていきたいと考えています。また、所属しているメンバーにとっても、大学院生の中でも楽しい思い出にしたいと考えています。



航空自衛隊小松基地にて